



四万十町
町内「ぶら〜り」散策

奥呉地

おくくれじ



牛馬の数が多く、古くから有畜複合型農業が主であったようである。それが今日まで脈々とつながってきたのであるうか、近年まで、仁井田周辺の地区の中では、突出して酪農を営む農家が多かった。また、旧窪川町内では、お茶の栽培にいち早く取り組み



小さなお堂として祀られている
宝蔵寺

国道56号の下呉地の三叉路から県道323号に入り松葉川方面に向かう。しばらく行くと、直進すれば松葉川という表示がある分かれ道にさしかかる。そこに「ヒロハチシャノキ(国の天然記念物の大木)へは右へ200m」と記された案内板があるのだが、そちらへ行く。「ヒロハチシャノキ」を左手に見ながらさらに1.5kmほど奥へ進むと奥呉地地区に入る。行き止まりまでおよそ5kmの谷間の地区で、奥呉地川が流れる。

元は「奥久礼地」であり、久礼の佐竹氏の領地「久礼郷」であったことを示している。しかし、同じ時期に記された記録を見ると、窪川郷に帰属している部分もあったようである。

その後、長宗我部の時代を経て、江戸期には窪川山内氏の支配となる。その頃に「呉」と改められたと思われる。下久礼地も同様である。余談になるが、下呉地と奥呉地の間に「魚の川」は、もともとは「中久礼地」だったのではないかと考えられている。

奥呉地は、戦国期の記録によれば、

んだ地域でもある。

地区の氏神様(本来は氏神様とは特定の一族の守り神で、土地や地縁の守護人は「産土神(うぶすながみ)」というのだが)は河内神社で、上と下とに分けて祀られている。

また、地区には江戸中期頃まで「宝蔵寺」というお寺があった。現在は、元の場所から50mほどの所に小さなお堂として残されていて、ここに地藏菩薩、馬頭観音が祀られているのだが、それらと並んで、簡素で小さな厨子がある。この中に、焼けこげてしまった仏像が入っている「らしい」。

「らしい」というのは、地区の方曰く「見てはいけなと言われてきたので、誰も見たことがない」からである。その仏像は、長宗我部の時代に何らかの理由で焼かれてしまったという説と、明治になって吹き荒れた廃仏毀釈政策によって焼かれてしまったという説があるのだが、厨子の中にほんとうに有るのか無いのかも含めて、真相は謎である。実に興味深い。

現在、奥呉地には26世帯、57人が暮らしている。

町のうごき

(5月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,325	-5	男 6	10	11	12
女	9,309	-3	女 4	11	14	10
計	17,634	-8	計 10	21	25	22
世帯数	8,604	-1	(5月中の届出)			
窪川地域	12,386人		大正地域	2,516人	十和地域	2,732人

四万十川の 水質状況

	適正值(mg/l)	6月9日
リン酸	≤ 1.0	0.374
硝酸	≤ 0.5	測定範囲以下
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以下

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部